

## 図書館と教養

渡部 幹雄

日本の公共図書館の戦後の発展過程を概観すると、1950年に図書館法が公布されて大都市や県立図書館が漸次整備され、1960年代の後半以降に中小都市図書館が整備されるという展開であった。一方同じように日本を代表する社会教育施設の一つである公民館は農山村漁村等の小さな自治体である町村部を中心に展開し、1960年代には殆どの自治体に浸透した。ところが図書館は都市部では急速に浸透したが、町村部では牛歩の歩みであった。筆者はそうした町村部における図書館の未設置状態を解消することをライフワークとして今日まで歩んできた。今図書館は都市部にあってはほぼ全国的に整備を終えた段階にある。ところが町村部では近年随分整備されたものの、図書館未設置の自治体が多数存在している。筆者は総ての自治体に図書館網が整備されることを強く願っている。総ての自治体に図書館網が整備されて初めて、総ての人に、いつでも、どこでも学びが保障される生涯学習体制のインフラの整備が完成されると考えるからである。

今は中学卒業後も、高校卒業後も、どんな所にも—例えば地理的にハンディのある離島であろうと—学ぶ意思さえあれば、放送大学や通信教育によって大学教育を受けることができるようになってきている。地理的なハンディを越えて日本の隅々までそうした学べる仕組みが確立されている。ところが大学での学びは講義だけでなく、講義内容の時には数倍にもなる関連学習が前提となっている。そうした関連学習を補完するのは様々な資料や書籍・情報である。そういう学びを支える大きな存在として図書館がある。全国民に公平に生涯学習の機会を提供している放送大学や通信制大学の役割が十全に果たされるためには、公共図書館が全自治体の生活圏域に整備されることが必要である。充実した生涯学習社会を普及させるために図書館未設置自治体の解消は急務である。付言すれば町村部は概ね一つの中学校区であり、町村部の図書館未設置の問題は都市部の中学校区の図書館設置の問題でもある。

学校外学習に必要な不可欠な装置としての図書館は未だ完成されていない。大都市在住者からは放送大学や通信教育の必要性そして図書館もない地方・離島にある町村部の“学びの環境”の実態は見えないが、本屋も図書館もない自治体がまだ存在している。放送大学や通信教育における附属図書館の機能を持つ公共図書館を全自治体が確保するまで関係者は全国的な視点を共有する必要がある。

さて、これまで図書館の数的な問題に触れてきたが、次に公共図書館の水準について述べることにする。

生涯学習を推進するには、どんな小さな図書館でも放送大学や通信教育の学びと同じ水準、もしくはそれ以上の水準が公共図書館には必要である。つまり学際的な視点での解決を視野に入れた資料群の構築が求められる。かなり高度な専門性の高い資料でさえ図書館のネットワークを駆使すれば利用者に提供できることを視野に入ると、約十万冊の資料群が図書館の自前の資料として書架に配架されていれば放送大学や通信教育の学習上の課題に対応が可能だと見ている。そしてその十万冊は一例を挙げると、国史大辞典、東洋文庫、講談社学術文庫、ものと人間の文化史シリーズ、ブルーボックス、グリーンシリーズ、平凡社ライブラリー、有斐閣アルマ、岩波現代全書のような蔵書群が教養書のコアの部分を形成するイメージである。これらの資料は様々な課題解決の一助になったり、様々な事柄について興味や関心を深めたりするのに有効な資料である。また放送大学や通信教育の学生の学習に役立つだけでなく、他の総ての人々にとっても有効な教養書でもある。これは筆者が地方の人口約五千人の町で約十万冊の資料の選書と提供業務、人口約九千人の町で二十万冊以上の資料の選書と提供業務に直接携わった経験から有効な水準だと感じている。この二つの町の図書館は、図書館界における一般的な図書館の評価基準である人口一人当たりの貸し出し冊数においても高い評価を得ることができた。世間にはベストセラー本を図書館に配置すれば貸し出し冊数は伸びると考える傾向が見られなくもないが、実際はその逆で、豊かな教養書の丁寧な選書こそが利用者増に貢献できるのである。

人口一万人以下の小さな自治体で十万冊或いは二十万冊の資料を備えている図書館というと、ごく稀な、例外的な図書館だと思われるかもしれないが、そうした図書館であれば利用者の卒業論文、博士論文の作成や単著作りを支援することができる。それだけの質量の資料が豊かな教養を育むのに必要な蔵書群であると筆者は自身の経験から考えている。和歌山大学に職を得て四年になるが、その四年間に二百校近い大学図書館を訪問して、大学の所有する資料群とその大学の評価（学生一人当たりの貸し出し冊数も含めた評価）が比例しているのではと（各大学図書館の教養書のコレクションの中身を観察して）考えるに至った。知識は万人のためにあることは言うまでもないが、その知識に万人が触れることができる環境にあるかどうかが肝要である。そこに先人の智慧を結び、繋ぐという図書館員の役割と専門性が存在する。

和歌山大学図書館の改革はまだ始まったばかりで、今教養書の入口の確保を模索している段階にある。

大学図書館も含めて、総ての図書館は真理に至る門であり、教養・学問の扉でもある。



蔵書数約 75,000 冊の国際教養大学図書館の閲覧室風景。「本のコロセウム」をテーマとした「半円」もユニークなデザイン。(写真提供：国際教養大学)



人口約六千二百人の福島県矢祭町のもったいない図書館の書庫と閲覧室の風景。寄贈で全国から四十数万冊の本が集まって話題となった。